

『紫式部集』 第八一・八二番歌考

―〈暦月〉・〈節月〉からみる「秋の果て」―

河野 瑞穂

清水 絢音

はじめに

『紫式部集』は、紫式部自撰の家集とされる。少女時代から晩年までの和歌が、それぞれ意図を持っておさめられていることにより、紫式部に関する第一級の伝記的資料とする見方も多い。それゆえ、ある種美化された紫式部像を通して和歌の解釈がなされる傾向が、認められないでもない。

本稿が対象とする第八一・八二番歌も、そのような紫式部像に即して解釈がなされてきた贈答歌の例といってよいだろう。以下、『源氏物語』作者紫式部が詠んだ和歌としてではなく、平安時代に生きたひとりの女性が詠んだ恋の歌という観点に立って改めて吟味し直し、その言葉ひとつひとつにこだわることによって新たな解釈の可能性を考察していく。

一、研究の現状と当該歌の基本事項

今回取り上げる贈答歌は、次のとおりである。^①

たまさかに返り事したりける後、またも書かざりけるに

をりをりにかくとは見えてささがにのいかに思へば絶ゆるなるらむ（八一）

返し、九月つごもりになりにけり

霜枯れのあさぢにまがふささがにのいかなるをりにかくと見ゆらむ（八二）

この贈答歌は、一般に次のように解釈される。^②

時たま返事をしていたが、あるときから後はもう返事を書かなくなったところが

事あるその折ごとに返事を下さるものと思っていましたのに、どういってお考えから、お返事が途絶えたのでしょうか。

返歌は、九月の終わりになってしまった

霜枯れの浅茅の中にまぎれ込んでかすかに生きている小さな蜘蛛が、どんな折りに巣を作るとお思いなのでしょう。

——寡婦の私がどんな折にお返事を書くとお思いなのでしょう。

まれに手紙の返事をしていた相手がいたが、ある時から返事を書かなくなったところ、相手から歌が贈られてきたという。^③まず、この贈答歌の内実がどのように理解されてきたかについて確認していく。

・夫の死後交際したが深い仲にもならなかった男性との贈答である。

（山本利達『紫式部集』）

・詞書や歌に、「たまさかに、返りごとしたりける」「をり／＼にかくとは見えて」などある点から、式部は、当初は時たまには返りごとをしていたようである。

それは、相手がまったく嫌悪すべき男というのではなく、世間的に多少は義理やつきあいを感じる相手であったため、花・紅葉の挨拶程度の消息に対しては、「たまさかに」あるいは「をり／＼に」、返りごとをしていた。

(南波浩『紫式部集全評釈』)

本稿において紫式部と歌のやりとりをした相手を特定することはしないが、この歌の贈り主は紫式部と「深い仲にもならなかった男性」と解釈されている点をおさえておきたい。

また、この贈答歌の詠まれた時期については、次のように受けとめられている。

・「霜枯れの浅茅にまがふさがに」は式部自身の姿である。九月、秋の終り、霜に焼けて枯れ枯れになった雑草の間に潜む子ぐも、そんな小さな縮かんだ小虫に自分の姿を描きだすのは、若くはない寡婦という自覚があったからだと思う。

(中略)「寡婦の私がどんな折にお手紙を書くとお思いですか、わたしがどんな気持ちで書くとお思いですか」と、式部の返歌は単純な恋の気持ちではないのだと暗に理解を求めているように思える。

(清水好子『紫式部』)

・式部の返歌の意は、“すでに殿方とのおつき合いには御縁のなくなってしまうておりますわたくしが、いったいどんな折に文を書くと思われているのでしょうか”——もはや手紙を書くつもりのないことを、婉曲に伝えて、男の懸想を拒んだのである。

(木船重昭『紫式部集の解釈と論考』)

この贈答歌の詠まれた時期が宣孝死後、式部の寡婦時代の歌と解釈されていることがわかる。浅茅の持つ「淋しい荒廃した場所」という表現効果と「霜枯れ」との意味から、夫を亡くしひとり生きる紫式部の姿が想像されるからだろう。

以上のことから、これまで第八一・八二番歌は、「夫の死後、深い仲にもならなかった男性との贈答歌」と解釈されてきたことが確認される。

続いて、この贈答歌に登場する「ささがに」について確認したい。「ささがに」は、第八一・八二番歌ともに使用される重要な言葉である。『大言海』の「ささがに」の項を確認する。⁽⁵⁾

允恭紀の歌に、佐瑳餓泥（山名）の區茂（雲）とあるを、ささがにと讀みたがへて、古今集の歌に、雲を、蜘蛛と解し、ささがにを、小さき蟹と解し、それを、蜘蛛の枕詞のやうに用ゐ、轉じては、直ちに、蜘蛛の事とし、又、允恭紀の歌意に、詩経の疏なる、親客の意をも取り成して、意中の人の來ることに云ふやうにもなりし語なり

（大槻文彦、大槻清彦『新編 大言海』）

『日本書紀』允恭紀に、ささがねに雲がわきあがつていたとあつたのを『古今和歌集』ではささがねをささがにと読み、雲を蜘蛛と解釈したことが始まりだという。また、允恭紀の歌から、『詩経』の豳風、東山編の「蟪蛄在戸」⁽⁶⁾の疏にある「親客」の意味も取り込み、親しい人の來訪の前兆を表すとする。

『大言海』の述べる『古今和歌集』の和歌を確認すると、次のとおりである。⁽⁷⁾

そとほり姫のひとりあて、みかどを恋ひたてまつりて

わが背子が来べきよひ也さ、がにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも

（『古今和歌集』墨減歌 一一一〇）

天皇を思慕し、衣通姫がひとり詠んだ歌である。「蜘蛛が巢をかけると待ち人が訪れる前兆」とする俗信を踏まえ、夫が訪ねてきてくれそうだと言んでいる。

「ささがに」の基本事項をふまえ、第八一番歌における「ささがに」の解釈のされ方について確認する。

・「ささがに」は蜘蛛のことで、蜘蛛が巢を搔くところから「書く」に掛け、「いかに」に「巢」を含めた。また、蜘蛛の糸は切れやすいので「絶ゆ」も縁語である。蜘蛛は恋人の來ることを知らせるといふ俗信があるので、恋歌になつた道具立てであるが、恋しい、逢いたいというのが普通の形である恋歌にしては、全体がもの静かで、「いかに思へば

絶ゆるなるらむ」と、のんびり問いただしているのは、いかにもたまさかの返事に満足していた人にふさわしい。

(清水好子『紫式部』)

・「ささがにの」を「い」の枕詞として詠みこんでいるのも、上の「かく」が書くと、くもが巢をかくの懸詞であることを語るものであり、返事を書くということは、「くもが巢をかく」すなわち、私の消息なり来訪なりを待ちうけていて下さると思っていたのに、という男の気持を表しているものである。

(南波浩『紫式部集全評釈』)

ささがにのふるまいの意味を用い、「待つ」ことを表現しているとす。この点を押さえておきたい。続いて、第八二番歌に目を転じる。

二、なぜ「九月つごもり」なのか

紫式部が生きた平安時代、人々の意識には二つの暦が存在していたとされる。いわゆる〈暦月〉と〈節月〉と呼ばれるものである。〈暦月〉は月の満ち欠けを基準とし、一年を二か月、一か月を二九日の小の月と三〇日の大の月に分けた「月切り」を示す。「某月某日」という日付の表現はこちらにあたる。対して、〈節月〉は二十四節気に基づき、一年を二か月とするものである。旧暦の二十四節気は冬至を計算の起点とし、一太陽年を二四等分し、一期間約一五日としている。「夏至」や「冬至」、「立春」や「立秋」などはこちらになる。

この暦の意識を念頭に置いて、第八二番歌の詞書に注目したのである。第八二番歌の詞書は「返し、九月つごもりになりにけり」となっている。これは〈暦月〉を意識した表現となっている。なぜ、返歌は「九月つごもり」に詠まれたのか。「九月つごもり」という日付は歌にどのような意味を与えるのか。この点について今一度考えてみたい。

「九月つごもり」について言及があるものを、次に挙げる。

・その返事がずっと遅れたのか、式部は「九月末になってしまった」と断り書きをしている。九月は晩秋なので、「九月つごもり」といえば、歌に「霜枯れ」とあるのがよくわかる。これを説明するために書き添えたのだろう。しかし、「九月つごもりになりけり」には、のびのびになってしまった述懐めいた気分が隠せない。

（清水好子『紫式部』）

・《返し、九月つごもりになりけり》と詞書する式部は、かなりの日数を置いてから返歌したのである。

（木船重昭『紫式部集の解釈と論考』）

・「九月つごもりになりけり」という時間の経過の記述の中に、贈歌を手にしてからの式部の思案や逡巡といった心情がおのずから浮彫りされる結果になっている。

（小町谷照彦『國文學 解釈と教材の研究』）

・「困ったわ。どう返事をしようかしら」とためらっているうちに、時が経って、ふと気がつけば、もう秋の末にもなっていたので、折からの秋の末——霜枯れの浅茅の中のささがにに托して、夫に死別して、まさに人生の冬を迎えるような気持でいる私ですもの、ささがにの巢がきに希望をかけるような気持はさら／＼ない——ということを表明したものである。

（南波浩『紫式部集全評釈』）

これらの記述を整理すると、「九月つごもりになりけり」には、「どう返事をするかためらっているうちに、日が経って遅れたことを弁明している」意を含むと解される。

しかし、相手からいつ歌が贈られてきたのが明記されていない以上、どれくらい日を置いたかは、すぐには判断できないのではないか。「かなりの日数が経ってから」という解釈には疑問が残りそうである。また、第八一・八二番歌そのもの

のには紫式部の「ためらいや逡巡」を読み取る材料はないように見える。

「九月つごもり」に詠まれたとされる歌が紫式部集には第八二番歌を入れて三首存在する。そのうちのひとつである第二番歌もまた、〈暦月〉・〈節月〉を問題としている。まずは第二番歌について取り上げたい。必要上第一番歌もあわせて全文掲げる。

はやうよりわらはともだちなりし人に、としごろへて行きあひたるが、ほのかにて、七月一〇日の程に月にきはひてかへりにければ

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにしよはの月かな (一)

その人、とほき所へいくなりけり。秋の果つる日きて、あかつきに虫の声あはれなり

鳴きよわるまがきの虫もとめがたき秋の別れやかなしかるらむ (二)

第一番歌の詞書にある「七月一〇日」は、古本系や定家自筆本系では「一〇月一〇日」とある。しかし、第二番歌は第一番歌と同年に詠まれたとすることから、多くの注釈書が別本系統や『新古今和歌集』により「七月一〇日」と改めている点は、周知のとおりであろう。このことによつて、傍線を付した第二番歌詞書「秋の果つる日」もまた、具体的にいつとするか解釈がわかれている。それらをふまえた上で、第八二番歌詞書の「九月つごもり」が、この第二番歌詞書「秋果つる日」、つまりは「秋の果て」という表現に置き換えられるかどうかについて検討してみたいのである。

三、「秋の果て」の意味

ここで、第二番歌に暦の観点から言及する田中新一氏の論を引用する¹⁰。

「秋のはつる日」とは、本源的には二十四節気に基づく「立冬日」の前日の謂であり、本来節月意識に関わることば

である。それに対し、「九月尽くる日」とは、「九月尽(日)」の訓読みで、「尽」が節月でなく暦月の末日を指していることは、「新古今集」秋部・五五〇の詞書にみえる「閏九月尽」の用法に徴して明らかである。「九月尽」とは本来暦月に関わることばで、節月に関わることばではない。

こうして、節月意識に発する「秋のはつる日」と、暦月意識に発する「九月尽くる日」とは、本来的に全く別次元のことばであり、この両者が現実として重なり合う可能性は確率として三十分の一度度しかない。

(田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』)

〈暦月意識〉に基づく「某月某日」という表現と、『紫式部集』の第二番歌に見られるような〈節月意識〉に基づく「春立つ日」や「秋果つる日」という表現には明確な違いがあり、両者を混同してはならないとしているのだ。〈節月意識〉の「秋の果つる日」は、立冬の前日でなければならないという。

だが、〈暦月意識〉をもとに、「九月つごもり」を「秋果つる日」と言い換えることは本当にできないのだろうか。

これについては、『古今和歌集』の配列に手がかりが求められるよう。『古今和歌集』巻第五秋歌下の末尾に収められた三首を確認したい。⁽¹⁾

秋の果つる心を、竜田河に思遣りて、よめる

貫之

年ごとにもみぢ葉ながすたつた河みなとや秋のとまりなる覧(三二一)

長月の晦日の日、大井にて、よめる

夕づくよをぐらの山になく鹿の声のうちにや秋は暮るらむ(三二二)

同じ晦日の日、よめる

躬恒

道しらばたづねもゆかむもみぢばを幣とたむけて秋は去にけり(三二三)

『古今和歌集』は、時間の推移に重きを置いて配列されている。その『古今和歌集』の秋の部立ての最後に配列された歌

の詞書は、「長月の晦日の日」であり、〈節月〉を意識した「秋の果つる心」よりも後に登場している。この事実からも、季節の終わりを表現するにあたり、〈暦月〉表現と〈節月〉表現は同等、あるいは〈暦月〉を優先させても構わないと考えられていることが確認される。「秋の果つる日」は立冬の前日に限定されるべきという田中氏の論は、一概に正しいとは言えないようである。

よって、第八二番歌詞書「九月つごもり」を「秋の果つる日」と言い換えることは可能であり、当該歌は〈暦月意識〉の観点から「秋の果て」と解釈ができることになる。

では、「九月つごもり」を「秋の果て」と言い換えることによって、歌の解釈にどう影響するのか。

前述したとおり、贈歌への返事が遅れたことを言い訳する意図は含まれていないと考えてよいだろう。もしも遅れたことを弁解するのであれば、贈歌を受け取った日にちとともに明記するなど、もっと他に表現があったらうと考えられるからである。

「秋」が「飽き」と掛詞になる場合が多いことは、今さら言うまでもない。「秋の果て」はそのまま「飽きの果て」と捉えられる。したがって、紫式部は意図的に返歌を「九月つごもり」まで引き延ばすことにより、贈歌の詠み手に対し、これ以上ない拒絶を表明したことになるのである。

「九月つごもり」が「秋の果て」、そのまま「飽きの果て」と言い換えられることにより、ほかの掛詞とも新しい呼応関係がみえてくる。

秋に色づく「浅茅」は「浅（し）」で浅い愛情を、色を変えて枯れる様子は心変わりで離れる恋人をそれぞれ連想させ、恋人の心変わりに喩える場合が多い。さらに、「霜枯れ」の「枯れ」には「離れ」が掛けられているとみて問題ないだろう。和歌のレトリックについて取り上げるならば、第八一番歌第三句「ささがにの」が第四句「いかに」の「い（網）」の枕詞であるのに対し、第八二番歌は上の句全体を使用して第四句「い（網）」を導く序詞となっている。第八二番歌の下の句全

体が、第八一番歌と嫌味なほどに対応している点も見過ごせない。

これらのように、「九月つごもり」とわざわざことわりを入れた詞書は、幾重にもちりばめられた掛詞の表現や、贈歌への対応も相まって、「恋の終わり」という明確な主題を浮き彫りにさせる働きを担っていると考えられる。贈歌の「ささがに」に「待つ」表現効果が含まれていることは、先に述べたとおりである。

もっとも、ここまで「九月つごもり」にこだわって考察を進めてきたのだが、返事をした日が本当に「九月つごもり」であったかどうかはさして重要ではあるまい。それは、「九月つごもりになりけり」の中に使用された「けり」によって補強できよう。「けり」は言うまでもなく間接体験の回想の機能を有するものであり、物語の枠組みを作る助動詞でもある。本場に重要なのは、『紫式部集』に「九月つごもり」と書かれている事実なのである。ここには、詞書を記した家集編者としての紫式部の姿がうかがえよう。意図して「九月つごもり」と表現することにより、読者に対してその真意を暗に示している家集編纂時の心理的現実こそが重要なのだ。

四、第八一・八二番歌の詠作時期はいつか

「九月つごもり」に焦点を当て当該歌の新たな解釈を探ってきたが、この第八二番歌の詞書には歌を読み解くための重要な手がかりがもう一つ含まれている。それは、この贈答歌が具体的にいつ詠まれたかという、詠作時期の特定である。

〈暦月〉と〈節月〉それぞれの暦の意識をもとに、「九月つごもり」が「秋の果て」と言い換えられるか否かについては先述したとおりである。その上で、改めて〈節月〉立冬と〈暦月〉「九月つごもり（月の終わり頃とする）」が重なり合う日を調べてみると、該当する年がひとつだけある。寛弘五年（一〇〇八）がその年にあたり、寛弘五年の立冬は九月三日なのだ。つまりは、寛弘五年における〈暦月意識〉の「秋の果つる日」は九月二九日であり、この日付は〈節月意識〉

による「九月つごもり」にもそのまま当てはまるのである。したがって、「九月つごもり」は〈曆月意識〉と〈節月意識〉両方の観点から「秋の果つる日」すなわち、「秋の果て」と言い換えることができることになる。

この贈答歌の直前である第七七番歌から第八〇番歌の詠作時期は、寛弘五年であることが確認できる。¹³⁾

宮の御産屋、五日（九月一日）の夜、月の光さへことに澄みたる水の上の橋に、上達部、殿よりはじめてまつりて、酔ひ乱れののしりたまふ。盃のをりにさしいづ

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ（七七）

またの夜（九月一日）、月のくまなきに、若人たち舟に乗りて遊ぶを見やる。中島の松の根にさしめぐるほど、をかしく見ゆれば

曇りなく千歳にすめる水の面に宿れる月の影ものどけし（七八）

御五十日の夜（十一月一日）、殿の「歌詠め」とのたまはすれば、卑下してありけれど

いかにいかが数へやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば（七九）

殿の御

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数も数へとりてむ（八〇）

これらの歌は『紫式部日記』にも関連する記述があることから、間違いなく寛弘五年に詠まれたものと言える。¹⁴⁾ 第七七番歌は、歌の詞書とあわせて次のような経緯で詠まれたことが分かる。

上達部、座を立ちて、御橋の上に参りたまふ。殿をはじめたてまつりて、攤うちたまふ。紙のあらそひとまさなし。歌どもあり、「女房、さかづき」などあるをり、いかがはいふべきなど、くちくち思ひこころみる。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ

「四条の大納言にさし出でむほど、歌をばさるものにて、こわづかひ用意いるべし」など、さなめきあらそふほどに、

ことおほくて、夜いたうふけぬればにや、とりわきてもささでまかてたまふ。祿ども、上達部には、女の装束に、御衣・御襦袢や添ひたらむ。殿上の四位は、袷一かさね・袴。五位は袷一かさね。六位は袴一具ぞ見えし。

敦成親王誕生五日の産養の夜、渡殿を訪れた道長に「盃を受けて歌を詠め」と命じられた。「今夜の望月の光と皇子誕生の慶事に照らされた盃は、この望月同様欠けることなく人々の手にわたり、千代にわたってお祝い申し上げることでしょう」と詠んだ。

第七八番歌の詞書は「またの夜」とあることから、五日の祝いの翌晩に詠まれたと考えられる。

第七九・八〇番歌は、五十日の祝いの場面に記述がある。

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、事はつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東おもてに殿の公達・宰相の中將など入りて、さわがしければ、二人御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせたまひて、二人ながらとらへすゑさせたまへり。「和歌ひとつづつつかうまつれ。さらば許さむ」とのたまはず。いとほしく恐ろしければ、聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまりひさしき君が御代をば

「あはれ、つかうまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせたまひて、いととうのたまはせたる。

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ

さばかり酔ひたまへる御こちにもおぼしけることのみまなれば、いとあはれに、ことわりなり。げにかくもてはやしきこえたまふにこそは、よろづのかざりもまさらせたまふめれ。千代もあくまじき御行くすゑの、数ならぬここにだに思ひつづけらる。

敦成親王五十日の祝いの夜、宴の場において、紫式部は宰相の君と御帳の後ろに隠れていたところ道長に見つかり、歌を詠むよう強要される。紫式部が「今日は五十日のお祝いですが、これからの幾千年という若宮の御齢をどのようにして

数えつくすことができましようか」と詠むのに対し、道長は「鶴のような千年の寿命があつたら、若宮の千年の御齡も数えとることができるだろうよ」と問答形式で和歌を交わし、若宮の将来を思い、祝いあつた。

なお、定家自筆本系統では、当該歌はこれら四首のあとに配列されている¹⁵。この事実も、当該歌が寛弘五年に詠まれたことを意味しているのではないか。

もちろん、寛弘五年とするのはあくまでも可能性の域を出ない。だが、第八一・八二番歌が寛弘五年に詠まれたという仮説に立ったとき、この贈答歌は田中氏の言う「三十分の一」の確率に当てはまる。同時に、〈暦月〉と〈節月〉両方の面から「秋の果て」の日に返事をしていたならば、よりいっそう強く、贈歌を詠んだ男への拒絶をうかがうことができるのである。

ここまで強い拒絶を示しているということは、相手は決して「深い仲にもならなかった男性」ではないだろう。相手が誰かまでは特定できないが、ある程度の恋愛関係を持った男との「恋の終わり」の贈答歌とするべきである。

五、まとめ

第八二番歌詞書にある「九月つごもり」に注目することで、第八一・八二番歌の贈答が「恋の終わり」を主題に、贈歌の詠み手への紫式部の強い拒絶の意が込められていることが見えてきた。したがって本稿では「夫の死後、深い仲にもならなかった男性との贈答歌」ととめるのではなく、「寛弘五年、ある程度の仲だった男性との恋の終わりの贈答歌」と新たに解釈し直す。以上を現代語訳に反映させると、次のようになるだろう。

時たま返事をしていたが、あるときからはもう返事を書かなくなった相手から

そのときどきに巣を作っていた様子なのに、蜘蛛がどう思っただけその糸が絶えているのでしょうか。

(その都度お返事を書いてくださっていたはずなのに、どういうわけでお返事が滞っているのでしょうか。お待ちしていますよ)

返歌は、九月の終わりになった

霜で枯れた浅茅にまぎれた蜘蛛が、そもそもどのようなときに巣を作ると思いなのでしょう、もう作ってはいないのですよ。

(心変わりした私が、今となつてはどのようなときにお返事を書き、あなたにまだ想いを寄せているのでしょうか。このような関係にももう飽き飽きなのですよ)

おわりに

はじめにふれたとおり、『紫式部集』は紫式部の伝記的資料として長らく研究されてきた経緯を持つ。近年、その研究姿勢を改めようとする動きが活発化してきたが、まだまだ歌そのものの見直しは十分に行われていないように見受けられる。実際に、当該歌においても「さがに」ばかりに目が行き、「九月つごもり」に重点を置いた解釈はなされていない。本来ならば紫式部の恋歌であるはずなのに、恣意的に検討の対象から外しているように思えてならないのである。

本贈答歌においては、「九月つごもり」に注意をすることにより、「恋の終わり」という主題が浮かび上がり、夫・宣孝以外との恋のやりとりの跡が見えてくる。『紫式部集』という作品そのものから生まれる解釈を、もっと大切にするべきではないだろうか。本稿は、その試みへの小さな挑戦である。

注

- (1) 引用本文は、古本系の最善本とされる陽明文庫本を底本とする〈新潮日本古典集成〉『紫式部集』（山本利達校注・一九八〇年二月）による。歌番号も同書による。
- (2) 歌の現代語訳は注(1)に同じ。詞書の現代語訳は本稿執筆者による。
- (3) 使用した注釈書ならびに研究書は次にあげるとおりである。
- ・竹内美千代『紫式部集評釈 改訂版』（一九六九年六月、改訂版一九七六年三月 桜楓社）。
 - ・南波浩〈岩波文庫〉『紫式部集』（一九七三年一〇月 岩波書店）。
 - ・山本利達〈新潮日本古典集成〉『紫式部日記 紫式部集』（一九八〇年二月 新潮社）。
 - ・木船重昭『紫式部集の解釈と論考』（一九八一年一月 笠間書院）。
 - ・木村正中・鈴木日出男・後藤祥子・小町谷照彦・秋山虔〈紫式部集全歌評釈〉（『國文學 解釈と教材の研究 昭和五七年一〇月号 第二七卷一四号』（一九八二年 一〇月 學燈社）。
 - ・南波浩『紫式部集全評釈』（一九八三年六月 笠間書院）。
 - ・伊藤博〈新日本古典文学大系〉『紫式部日記（紫式部集）』（一九八九年一月 岩波書店）。
 - ・中周子〈和歌文学大系〉『紫式部集』（二〇〇〇年三月 明治書院）。
 - ・田中新一〈新注和歌文学叢書〉『紫式部集新注』（二〇〇八年四月 青簡社）。
 - ・笹川博司〈私家集全釈叢書〉『紫式部集全釈』（二〇一四年六月 風間書房）。
 - ・清水好子〈岩波新書〉『紫式部』（一九七三年四月 岩波書店）。
 - ・田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』（一九九〇年四月 風間書房）。
- (4) 引用は大野晋ほか編『岩波古語辞典 補訂版』（一九九〇年二月 岩波書店）の「浅茅」項による。
- (5) 引用は大槻文彦、大槻清彦『新編 大言海』（一九八二年二月 富山房）による。
- (6) 引用は石川忠久〈新釈漢文大系〉『詩経 中』（一九九八年二月 明治書院）。

- (7) 引用は小島敬之、新井栄蔵校注〈新日本古典文学大系〉『古今和歌集』(一九八九年二月 岩波書店)による。
- (8) 八二番歌のほかには本文に掲載した二番歌と次に挙げる一首である。引用本文・歌番号は注(1)に同じ。
「物や思ふ」と、人の問ひたまへる返り事に、九月つごもりに／花すすき葉わけの露やなにかく枯れ行く野べに消えとまるらむ／わづらふことあるころなりけり(八七)
- (9) 注(1)に同じ。
- (10) 田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』(一九九〇年四月 風間書房)。
- (11) 注(7)に同じ。
- (12) 調査には湯浅吉美編『日本暦日便覧 増補版』(一九九〇年二月 汲古書院)を使用。
- (13) 注(1)に同じ。括弧内の日付は本稿執筆者による。
- (14) 『紫式部日記』の引用は、〈新潮日本古典集成』『紫式部日記』(山本利達校注・一九八〇年二月)による。
- (15) 定家自筆本系の歌番号は次のとおりである。引用本文は〈岩波文庫〉『紫式部集』(南波浩校注・一九七三年一〇月)による。
八七・珍しき光さし添ふさかづきはもちながらこそ千世をめぐらめ
八八・曇りなく千歳に澄める水の面に宿れる月の影ものだけし
八九・いかにいかが数へやるべき八千歳のあまり久しき君が御世をば
九〇・葦田鶴の齢しあらば君が代の千歳の数も数へ取りてむ

(国文学科四年生)